

NO. 38  
March '05

# Newsletter

神戸女学院大学  
女性学  
インスティテュート

## 「ナナムの家」を訪れて

〔石川ゼミ3年生〕 深尾絵里・岩本香織・葛本涼子・木下優子・嶋海奈々世・小川陽子・大西和加奈・大坪香菜（文責）・竹田衣里・武輪知恵・寺本 梓・堤 麻里

私たちは、2004年4月から日本軍「慰安婦」問題を学び、考えてきました。「慰安婦」とは、かつての戦争で日本政府が軍人の性欲処理のために、多くのレイプを強制された人たちのことです。毎日数人から数十人の将兵によるレイプが、数年つづいた人もいます。侵略の先々で「慰安婦」は徴集されましたが、もっとも多く「利用」されたのは、日本の植民地下にあった朝鮮の女性たちでした。私たちより、はるかに若い女の子もたくさんいたのです。

最初は文字をつうじ、あたまで理解するだけでしたが、次第にこれが、現代の社会と私たちの問題としてとらえられてきます。ゼミ旅行で韓国の「ナナムの家」を訪れたことは、その点で決定的な意味をもちました。「ナナムの家」とは、日本政府に誠意ある謝罪をもとめて闘う、元「慰安婦」たち10人ほどが共同生活を送っている場のことです。同じ敷地内には、「日本軍「慰安婦」歴史館」も併設されています。

ゼミ旅行は、2004年9月6日から9日までの3泊4日で行いました。初日の9月6日はソウルで夕食をとり、少しだけ街を歩きました。翌7日、雨の降るなか、私たちは「ナナムの家」を訪れました。ハルモニたちの証言がこめられたビデオを見て、歴史館を詳しい解説を聞きながらじっくりと歩き、何より、直接ハルモニから話をうかがう機会をもちました。「ハルモニ」というのは、元「慰安婦」のおばあさんを敬意を込めて呼ぶことばです。

雨のあがった夜、スタッフの方や数名のハルモニと、外で食事をとりました。ハルモニには日本語の上手な人もいます。夕食後のカラオケ大会では、日本の歌も披露されました。「アリラン」という、韓国では知らない人のいない、しみりとした民謡を歌ってくれたハルモニもいました。ハルモニとの親しい交流は、問題の早い解決を望む私たちの思いを強めさせてくれました。

9月8日にはソウルにもどり、毎週水曜日にハルモニたちが日本大使館前でやっている「水曜集会」に参加しました。日本政府への抗議と問題解決にむけた努力の要請が目的です。参加者は80人ぐらいで、この日

は半分以上が日本人でした。大使館の前には警官隊の物々しい警備がありました。このような集会に参加するのは初めてです。誰もが不安と緊張を感じさせられました。

日本から「私たちも謝る。日本政府も謝れ」と書いた横幕はもっていったものの、この集会には参加するだけのつもりでいました。ところが、主催者の方が、せっかく日本から来たのだからと、私たちに発言をもとめてきました。少しあわてましたが、代表して3人のメンバーが、私たちの学び、「ナナムの家」を訪れたこと、そして日本政府は誠意をもって謝罪すべきだという私たちの意見を述べました。集会への参加をつうじ、問題解決に向けたハルモニたちの強い意志と、日本政府の冷たい態度を身をもって知ることができました。

私たちは、いまこの旅行の体験をふくためた1冊の本をつくっています。少しでも問題の解決にむけた力になりたいと思つてのことです。タイトルは『ハルモニからの宿題』です。2005年2月には出版の予定です。「慰安婦」問題を知らないというみなさんにも、ぜひ読んでいただきたいと思います。（2005年1月2日）

## 学外講演会で講演を行なつて

【第1回：2004年11月10日】……………金沢謙太郎  
●「豊かに生きるということ

### — インドの環境運動、チプロコに学ぶ —

チプロコとはヒンディー語で「樹木に抱きつく」の意で、北インド、ヒマラヤ山麓の女性たちによる戦闘的・非暴力の運動のことをいう。彼女たちは現在、在来の種子の多様性をまもる運動を展開している。本講演では、インドで実施された一次産業のモノカルチャー化（画一化、均質化）の具体的事例を批判的に検討しながら、それに抗するチプロコの論理と実践に注目した。

ここに、受講された方々のご質問・ご意見を採録させていただきます。まず、インドのいわゆる伝統社会に対する評価についてである。たしかに、チプロコの担い手はインドの伝統技術に対して、近代技術よりも相対的に高い評価を与えている。これは、前者が後者に比べより持続可能で、生物や文化の多様性を支えるものであったという視点から来ている。だが、彼女らは昔に戻ることを主張しているのではない。伝統社会からも近現代社会からも学ぶべきことは学びながら、持

続可能な生き方や社会のかたちを示そうとしているのである。

また、複数の方々からは「食」と「農」の距離が拡大している現状について懸念が表された。私に問題解決の妙案があるわけではない。が、まずもって大事なものは、食べものが本来どこから来てどこへ行くのかについて想像し、知ろうとすることではないだろうか。「もの」の流れをその全体のプロセスの中で理解したとき、そこから何をしたらよいかという結論はおのずから導き出されてくると思う。身近なところでも、武庫一寸ソラマメや尼イモなど失われつつある伝統野菜をまもろうという活動が始まっている。

(人間科学部専任講師：環境社会学)

【第2回：2004年12月4日】……Yolanda Alfaro Tsuda

●「津田梅子とその家族のダイアスポラ」

(The Diaspora of Tsuda Umeko and her Family)

In 1974, when I was a student at the University of the Philippines, I met a Japanese man who later became my husband. I came to know that he is a direct descendant of Tsuda Umeko and became fascinated with how a family changes through historical periods. My lecture in Takarazuka was my attempt to discuss the cycle of modernization, conflict and change of four generations of our family, based on an on-going research that I have done in Tokyo, California, Pennsylvania and Boston.

Tsuda Umeko is a well-known historical figure. What is not known are the struggles of her family members, particularly the women, as their Western education and Christian upbringing clashed with the conservative Japanese society that treated women very lowly, and with the fact that they belonged to the upper-class, with blood ties to the Imperial Family. Using pictures from family albums kept in Tokyo, the lecture focused on the lives of the Tsuda family in Japan from the Edo to the Meiji Period, to the formation of the Japanese-American community in the United States and how it was caught between in these two countries during World War II.

I ended the lecture with the comment that like the other women in the Tsuda family, I bring with me a new set of modernization, conflict and change as I struggle to raise my four children to balance an appreciation of the cultures of the Third World, Japan, and the United States.

(Associate Professor of Department of English  
: Global Studies)

「しずかちゃん」から「しずちゃん」へ

横田 恵子

皆さん、漫才コンビの「南海キャンディーズ」をご存じだろうか？ ポケ役の女の子のほうは「しずちゃん」。182センチの長身で、低い声でボソボソとボケる。対してフェミニンなつつこみを見せるのは彼女より小柄な男子、「山里クン」。彼らのネタを、これも最近恒例になった年末のTV番組、「M-1グランプリ」の決勝大会で初めて見た。ちなみに、この催しで女性が決勝に勝ち残ったのは初めてである。

はっきり言って面白かった。自称「喋る岩」、デカくて地味な容貌のしずちゃんは、衣装も普段着風パンツ。愛想笑いすらせず、自らのマイノリティぶりを嘆き、ぼやく。そう、デカイということは、日本ではマイノリティ扱いなのである。司会の井上和香に向かって「あんた、水着買いに行ったら（サイズがないから）アメリカ行け、って言われたことないやろ？」と挑発(?)する。山里クンは、そんなしずちゃんを持って余し、オロオロしているだけである。ところが、である。う～ん、見ていてしずちゃん、全然不幸じゃないのだ。構図としては、確かに暗めのプサイク女がキュートなアイドル女に僻みやつかみをぶつけているのだが、そうっていないのだ。そのとき一瞬アップになった井上和香の表情のほうが、むしろ心許なげに見えた。圧倒的に男にモテないポジションのはずなのに、しずちゃんは陰気に平気なのである。ただ、面白くなさそうにブツブツ言っているだけである。それを見て山里クンはひたすらため息をつき、かけるべき言葉を探して差し出すのだが、しずちゃんは全然聞いていない。

終了後、審査員のひとりのコメントで合点がいった。彼曰く、「これは全く新しい男女コンビの形なんですね」。「従来の男女コンビは、男が女を揶揄し、最後には必ずどつく。ところが、南海キャンディーズは、男はひたすらオロオロしてるんだよね。いいよねえ。」うん、いいよねえ、と私もつぶやいた。「ドラえもん」のしずかちゃんは、ひたすら出来の悪いのび太を励まして支えていたけれど、しずちゃんは別に山里クンに支えられていない。山里クンは一生懸命何とかしようとしているけど、しずちゃんは、それも織り込み済みの上でマイペースである。いいよね。

(文学部助教授：社会学)

## 「日本人女性の声」

田 中 真 一

「日本人女性の声は他国女性のそれと比べて高い」という指摘がしばしばされる。百貨店のアナウンス、エレベーター案内係、電話での受け答え……、言われて見れば思い当たることがいくらかある。

十数年前の日米女性アナウンサーの声の高さを測定したある調査によると、米国162～206ヘルツ、日本202～276ヘルツであり、日本人女性アナウンサーの声はるかに高かった（音合わせに使われる「ラ」は440ヘルツで、オクターブ下の「ラ」は220ヘルツである）。

生物学的に見ると、声の高さは声帯の大きさ（長さ、厚さ、太さ）に関係し、声帯が大きいほど低い声が、小さいほど高い声が出やすい。体の大きい人間ほど声帯も大きいことが多いので低い声が出やすく、それはちょうど、弦楽器がヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスと大きくなるにつれて低音が出やすく（高音が出にくく）なるのと似ている。

以上を女性の声の高さの違いに当てはめると、日本人女性の声が高いのは米国人女性より体格がやや小さいからと解釈できるかも知れない。たとえば日本人女性がヴィオラで米国人女性がチェロといったように。

たしかにそのような側面もあるが、同時に社会的側面も無視できない。ヴィオラでヴァイオリンの曲（音程）を弾くといった具合に、日本人女性は社会的な要因から自分の体から出る音域より高く話しているということも事実である。そのような音域は出して出ないわけではないが、それが体に合っているかどうかとは別の問題である（なぜ高い声で話さなければならないのかについては、紙面の関係上、省略する）。

ところが近年、日本人女性の声が低くなり始めたという報告が、あちこちで聞かれるようになった。生物学的にみると、体格がよくなり、声帯が大きくなったことがあげられる。と同時に社会的には、「ヴィオラがヴィオラの音域を取り戻しつつある」と解釈できる。そういう意味ではここ数年の変化はごく自然な流れである。ただし、ヴィオラでチェロの音域を出そうと懸命になっているように見える例も散見される。自分の体に適した音域で話すのは、なかなか大変なものである。（文学部専任講師：音声学、言語学）

## 2004年度後期活動報告

### I 講演会・セミナー等

[前期開講分については前号を参照のこと]

#### 学外講演会

会場：宝塚市立男女共同参画センター・エル

<第1回> 2004年11月10日（水）

「豊かに生きるということ

— インドの環境運動、チプロに学ぶ —

講師：金沢謙太郎氏

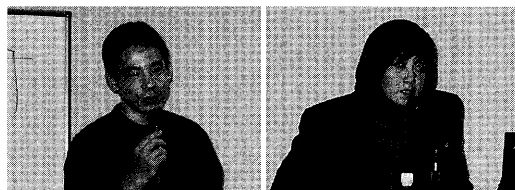
（神戸女学院大学人間科学部専任講師：  
環境社会学）

<第2回> 2004年12月4日（土）

「津田梅子とその家族のダイアスポラ」

講師：津田ヨランダ・アルファロ氏

（神戸女学院大学文学部助教授：  
グローバル・スタディーズ）



金沢謙太郎氏

津田ヨランダ・アルファロ氏

### II シンポジウム

日時：2005年2月22日（火）

テーマ：「良妻賢母をのり越えて」

講師：小山静子氏（京都大学教育学部大学院人間・  
環境学研究科教授）

原田園子氏（神戸女学院大学学長）

飯田祐子氏（神戸女学院大学文学部助教授）



小山静子氏

原田園子氏



飯田祐子氏

## Ⅲ 研究助成

「異文化表象と女性史」

真栄平房昭 [文学部教授]

「第一次世界大戦を背景とする女性像の問題」

平井雅子 [文学部教授]

## Ⅳ 学会等出張補助 (国内・海外)

2004年度は申請なし。

## Ⅴ 授業 (科目名: Cu234 「女性学」)

Cu234 (1) (2) 「女性学」 [主題コース] として  
前期後期とも本学にて開講した。

## Ⅵ 学生懸賞論文 (「女性学インスティテュート賞」)

2004年度 (第6回) は2編の応募があったが、残念ながら「女性学インスティテュート賞」の該当者はいなかった。

## Ⅶ 出版物

『女性学評論』第19号

特集: 異文化とジェンダー (2005年3月発行)

「ニューズレター」No.37 (2004年10月発行)

「ニューズレター」No.38 (2005年3月発行)

## — 2005年度 (第7回) 学生懸賞論文募集 —

賞の名称は「女性学インスティテュート賞」。対象は本学学生 (学部生・大学院生) 及び2004年度の本学卒業生・修了生が執筆した女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文。最優秀賞論文 (1編) には賞金5万円及び賞状、優秀賞論文 (2編) には各2万円の賞金及び賞状が授与される。また最優秀賞論文については『女性学評論』第20号 (2006年3月発行予定) に全文が掲載される。締切は2005年7月25日 (月)。選考結果の発表及び表彰は2005年10月中旬の予定。詳細は当インスティテュートまで。

## — 2005年度前期講演会等のご案内 —

## ■特別講演会

日程: 2005年6月3日 (金) 10:35~11:25

「国境を越えた女たち

— オーストラリアの日本人戦争花嫁 —」

講師: 田村恵子氏 (オーストラリア国立大学客員研究員)

≪申し込み: 不要、受講無料≫

## ■連続セミナー「ジェンダーとセクシュアリティ」

日程: 2005年6月10日~7月1日の金曜日、

14:00~15:30、全4回

会場: 神戸女学院大学教室

講師: 石谷真一氏 (神戸女学院大学人間科学部助教授)

横田恵子氏 (神戸女学院大学文学部助教授)

米田眞澄氏 (神戸女学院大学文学部助教授)

高橋友子氏 (神戸女学院大学文学部助教授)

[順不同]

定員: 40名 \* 3回以上の出席者には「修了証」を発行  
≪申し込み: 要、受講無料≫

## Cu134(1)(2)「女性学 (実践編)」

## 開講のお知らせ

2005年4月より、Cu134(1)(2)「女性学 (実践編)」が新しく開講されます。学生の日常生活にとって身近な問題を取り上げ、考えさせ、それについての理解を深め、よりよい学生生活をおくれるよう実践的に指導する内容となっています。

女性学インスティテュート  
インターディシプリナリー・プログラム

2004年度より、本学で開講される科目のうち、女性学やジェンダーの視点を取り入れたものを在学期間中に10単位 [「女性学」は必修] 取得した学生に、同プログラムの「修了証」が交付されることになりました。

各年度において該当する科目は、年度始めにブラック・ボードで告知されます。なお、2003年度までに学生が取得した「女性学」または「ジェンダー論」の単位も、履修認定の対象となります。

≪修了証≫の交付を希望する学生は、必要単位の履修を証する書類 (成績表等) をインスティテュートまで提出して交付を受けてください。

## 「図書の閲覧貸出を図書館へ移管」のお知らせ

従来女性学インスティテュートでは、女性学、ジェンダー・スタディーズ関係の図書の閲覧・貸出を行っていましたが、2005年4月より、図書館で取り扱うこととなりましたのでお知らせ致します。

## 2004年度女性学インスティテュート編集委員

石川康宏、難波江和英、清水忠重、塩見尚史、高橋友子  
(委員長) (ABC順) 編集事務: 溝口芳子

編集・発行: 神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX: (0798) 51-8545

E-mail: gender@mail.kobe-c.ac.jp

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>

女性学インスティテュート